

色 彩 と 幼 児

木 村 俊 夫



乳 児 の 色 彩 反 応

乳児は心惹かれるものに向かってすぐに手を伸ばすが、同形同大の二箇の物体を乳児の眼前に示す時一方を灰色、他方をはなやかな色とすると後者の方へ手を伸ばす。また同じ色相ならば一般には彩度の高い方へ手を伸ばす。これらから推して、人間は随分早い頃から色彩に反応を示すものであることが分る。

乳幼児は確かに色彩に心惹かれるものであるが、一般に考えられているように彩度の高い色がその嗜好に適するか否かは疑問である。一時的に示す反応は彩度の高い色の場合の方が優勢であるとしても、彼らの心理を平静・安定・快的のものにする色は必ずしも彩度の高いものには限らない。むしろ、バステル風の明る

く彩度の低い色の方が好ましいのではないか。しかしこういう方面の確実な研究報告は乏しいので、今後の実家家たちの観察・調査に期待したい。

いづれにしても、今日の乳幼児を取りかこむ玩具の世界は、最近大分その色彩の彩度が低くなってケバケバしさや毒々しさが減ってきたが、未だ種顔料の色そのままのようなキラキラしい彩色のものが絶えない。しかし、軟かい美しい夢は明るく彩度の低い色に包まれてこそ育つのである。

幼 児 の 色 彩 知 識

眼に映ずる限りでの色彩感覚はかなり早くから発達すること、物体の種類・性質をその色彩で区別していることから推察でき、それらの色を抽象して、色名で区別するというような観念的の知識の発達はそれと平行しない。

最初に覚えるのは色名中の基本色名(赤・黄・緑・青・紫など)であるが、アカという色名で色の赤・橙・黄を呼んだり、アオが緑や紫をも指すことは稀れてはない。アオとミドリは白砂青松、眼に青葉、青葉に塩、などの如くおとな社会でも色名としては混同しているから仕方がないかもしれない。が、黄をもアカと呼び、紫をもアオと称するのは普通にはおかしく聞えるかもしれない。しかし、幼児がアカという色名を抽象的にでなく、いさか具体的に「温かい感じのする色のこと」、アオを「冷たい感じのする色のこと」として覚えていたのだとすれば、その知識は一般よりはズレていて、適用範囲が拡大されてはいるが、色彩感覚に伴なう温寒の感覚は正しい。誤まった色名知識を是正しようとするの余り、この感覚を圧迫することのないよう、細やかな配慮が必要である。

幼児の色彩共感覚

ある感覚に伴なう別種の感覚を共感覚とか随伴感覚とか呼ぶが、色彩に温寒、軽重を感じるのはこの共感覚の一種で、それを特に色彩共感覚と称する。幼児にはおとなよりも共感覚が豊富に体験されているはずである。なぜなら共感覚は心性の未分化構造を基盤として成立する心理機能だからである。しかし、幼児は体験の表現力が乏しいから、それらはおとなには断片的にしか知られていない。次にそれらを若干紹介しよう。

心理学者スクーピンの子どもは、三才の頃天竺葵の葉の匂いを緑、紫天竺葵では赤、リラの葉の場合は黄だ、と言ったという。筆者の知人は先生の宅の坊ちゃんと山を歩き峠で汗を拭っていた際にその坊ちゃんが「この風は白粉をつけている！」と叫んだので驚いた、ということである。この話を聞いた瞬間に、私は芭蕉の

石山の石より白し秋の風

の句を想起した。

音に色を感じることを同じ共感覚ではあるが特に色聴と称している。これは古くからかなり多くの心理学者が観察・報告をしている。音の高低・強弱・音色の差などに関してさまざまの報告がある。色音楽はこの色聴を逆の方向から利用して、色刺戟の変化により音楽を感じさせようとする試みであるが、色と音階の結びつきは古来の色聴に関する報告に基づいて決定したものだ、と言

われている。

幼児には多く見られる現象であるから、ここにはこれ以上の紹介はやめにして、読者各自に職場での観察を御願ひすることによよう。

幼児用色神検査表

世間では小学校への入学時にあるいはそれ以後に初めて子どもの色神異常を知る親が多いが、幼児時代においてそれを検査する方法がないであろうか。従来の石原式学校用色神検査表では、被検の方に少なくともアラビア数字の知識がない場合は使用できない。ある種の検査表では曲線を筆で辿らせる、という方法で文字知識の欠陥を補っている。しかし、最近筆者の友人が作成した検査表は、幼児の嗜好に適し幼児が喜んで検査を受けるように工夫されている。

それは四箇一組の図形から成り、その一つ一つは卍・⊕・□・×で、いずれも上下・左右が相称である。この図形が他の検査表の数字または曲線に相当するわけである。そしてこの四箇の図形は一八糶平方の厚紙の四象限の各々に貼付されている。そしてこ

の厚紙は更にその中心を軸として左廻り右廻りのいずれも自由にできるように、中心部をピンで貫いて台紙に留めてある。さてこの厚紙に貼付された図形と同様の図形を白黒だけで示した厚紙が台紙に連結しているが、検査はその白黒図形のまず一つを指して、「これと同じ形をしたのはこの色のついた方のどれですか」と尋ねて検査表の方の図形を指定させる。この時、その厚紙を適当に廻転させれば場所を記憶されることがなく、図形は廻転しても逆立ちすることのない性質のものが選んであるから便利である。

この検査表は「幼児用色盲表」と称し、東京都中央区月島西仲通七丁目、村上色彩技術研究所で作成している。(八〇〇円)

幼児の色彩想画

かつて桐原葆見博士が、幼児が自由に書く人物画を点検して知能程度を検査する方法を考案され(桐原葆見「精神測定」)、また最近大阪府教育研究所の扇田博元氏が「不良化傾向児を発見するための人物描画テストの研究」(一九五五)を発表しておられる。これらはいずれも色彩を問題にしない方法である。

これに対して、創造美育協会の人々の方法は色彩をも、否、色

彩を重視した心理分析法を採用して研究を続けている。この人々のこの方面の研究の出発点は、アルシューラーならびにハットヴィックの「描画と性格」であるが、各地の協会員集団の間でそれらの研究が蓄積されている。しかし、それらの研究が未だ十分に科学的に体系化されていないのは残念である。

このグループの先輩の浅利篤氏は、しかし、よく多くの材料を「児童画の秘密」および「児童画と家庭」(いずれも黎明書房)にまとめておられる。この協会の人々の目下の狙いは、想画を通して子どもの心理傾向特にフラストレーションの有無・内容を診断し、想画態度を中心として生活態度の指導を試みんとする、極めて心理療法的の教育的態度の確立、ということであろうか。

色彩を利用した幼児

・ 児童用の心理検査

想画による心理検査は検査法や結果の表示法を数量化することが困難なのでそれを標準化されたテストにまで洗練するには未だ未だ歳月を要するのであろう。そこで想画ではなくて、色彩を利用する他の性格テストを瞥見すると、まず「色彩象徴法性格検

査」があるが、これは検査の方法・内容から言って中学生以上でないと適用困難である。しかし、検査原理は幼児の場合にも適用し得るから、幼児・児童用が作成されてもよいと思う。

幼児にでも可能なものとなると極めて限定されてくるが、「色彩ピラミッド検査」ならば可能であろう。

これは、材料としては二・五糶平方の色紙二四種(一種に何枚も用意してある)と、二・五糶平方の図形をピラミッド型に積み重ねた線図形(最下段に図形が五箇横に並ぶ。したがって一つのピラミッドには二・五糶平方の図形が一五箇必要)の二種である。検査法は、被検者に色紙を自由に選択させ(同色を何枚使ってもかまわない)、それを線図形の上に配置して一つ一つのブロックの色どりのピラミッドすなわち色彩ピラミッドを構成させるだけであるから、幼児は喜んでこれをおこなうであろう。判定法はピラミッド上の色彩の配列の仕方によるものであるが、これには一定の規準がある。しかし色の種類やその数の差により異なる標準も構成できる。こういう仕事は日常幼児と親しく接する人々こそ丹念な観察もできるので、こういう研究は是非幼稚園の先生方の中から提出していただきたいものである。

(茨城大学)